

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 39

伯耆四王寺と山陰道の古代寺院

山陰道の古代寺院シリーズ 2

寺 岡 洋

おおはら とうばん どうばん
大原神社の幟幡（幟幡）支柱

倉吉市（鳥取県）東郊を北流し日本海に流れる天神川右岸、三朝温泉の北方の集落に大原神社という村社がある。祭日（10月9日）に幟を立てるのであるが、木柱を支える支柱が古色を帯びた石製である。

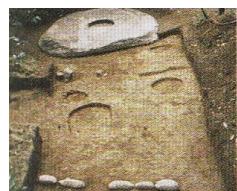
古代の寺院や宮殿も法会（ほうえ）や様々な儀式の際、やはり幟（幟幡）を立てており、その支柱を幟幡（幟幡）支柱という。播磨でも吸谷廃寺（加西市）・野村廃寺（西脇市）・奥村廃寺（たつの市）などで幟幡遺構が確認されており、韓国では現物が残っている。

そこで、大原神社の例祭にあわせ、いつもお世話になるK氏と幟幡を見に出かけた。

中国自動車道・院庄ICから吉井川に沿って北上し、まず、奥津温泉にある奥津歴史資料館（岡山県苦田郡鏡野町 0868-52-0888）に寄る。古墳から出土した鉄滓やタタラ製鉄のケラなどが展示されており、古代から鉄生産が行われていたようだ。核燃料で知られる人形峠を越えると鳥取県三朝町。

大原の里に幟は立っていたが、木柱が傷み危険だということで今年から鉄棒に新調された由。

大原には新羅と関連する志羅谷・志羅谷川という地名・川が残り、そこに、新羅系の瓦が出土する大原廃寺址が史跡として保存されている。一度紹介しているが、再度、取上げる。（『むくげ通信』253 2012）。

■大原廃寺
(国史跡)

大原神社から集落内を南へ少し歩くと「大原廃寺」と「志羅谷」の表示があり、山道に入る。柿がいっぱい実る道を少し登ると看板があり、巨大な塔心礎が残る。丘陵の尾根部裾を削り金堂・塔址などを造成している（標高約45m、平野との比高約20m）。6次にわたって調査が行われた。

寺域は、少し歪な四角形に推定復元される（南辺と西辺：約75m、北辺・東辺は不明確）。寺域を区画する施設は確認されていない。寺域内は平坦で、畑・果樹園・山林・竹林で歩きにくい。

伽藍配置は、西に金堂、東に塔、金堂の真北（後に講堂を配する変則的な法起寺式）になる。

塔心礎は動いていないが、心礎以外の礎石も礎石の抜き取り跡も見つかっていない（上図）。基壇の規模は約11m。金堂基壇は東西約17m×南北約13m。

講堂は桁行7間×梁行4間の掘立柱建物と基壇の一部が確認された。掘立柱建物の講堂は稀である。

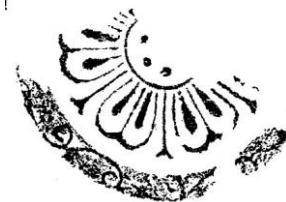
塔跡の北側に中世の礎石建物があり、後代まで信仰の場として機能していたようである。

出土遺物は、瓦以外に、博仏（せんぶつ）7点、塑像13点（螺髪（らほつ）を含む）、瓦塔（がとう）1点、泥塔1点、銅鏡1点、土馬1点、鞆羽口（ふいごはぐち）3点、陶硯（とうけん）・転用硯・各種土器など縄文時代～中世まで多種多様。新羅土器の可能性がある杯蓋（つきふた）が出土している〔亀田氏教示のこと〕。

瓦類

軒丸瓦 8型式（I～VIII類）

- IV類は複弁六弁蓮華文
47点出土 VIII類と似る
- VIII類も複弁六弁、外縁に凸線
により唐草紋が巡る〔右図→〕

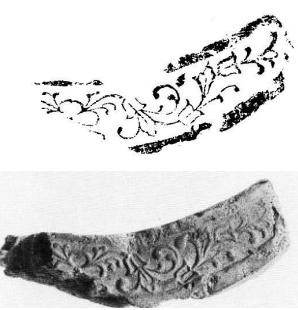


「弦のみが表現され、華麗

さに欠ける」との由。5点出土 IV+VIII=52点

軒平瓦 5型式（I～VI類）6種類、137点。

- I類 三重弧文 頸面に2条の凹線（頸部施文）
- II類 均整忍冬文〔右図→〕
- III類 無文線（頸部施文）
- IV類 二重弧文（頸部施文）
- V類 平瓦の凸面に施文



軒平瓦 II類は新羅との関係が窺え、頸部施文は播磨、山背とのネットワークが推測される資料である。

鷗尾 破片4点

創建・廃絶年代について

報告書では7世紀末頃に創建され、8世紀末頃、「それまでと様相が異なる新羅的要素を持つ文様の軒丸瓦と、独特の萼、蕾、花弁を表現した軒平瓦を使用」（上図）し、12世紀ごろ講堂が廃絶する。

伯耆守・金上元—新羅人？

慶雲四年（708）、武藏国秩父郡で和銅が発見され、年号が和銅と改元された。関係者が叙位され、その中に「金上元」という人物が、无位（むい）から従五位下と大抜擢されており、その昇進ぶりから「和銅」の発見者と推測されている。金上元は新羅系の人物であろう。彼は和銅二年、伯耆守に任命されている〔続日本紀〕。大原廃寺や大御堂廃寺の新羅系遺物はあるいは、伯耆守・金上元と関連するかもしれない。

□大御堂（おおみどう）廃寺（国史跡）

大御堂廃寺は伯耆ではめずらしく沖積地に立地する。律令制下の久米郡勝部里。山陰で最も早い時期に創建されたとされる。伽藍配置は西に南北棟の金堂、東に塔、正面に講堂を配する觀世音寺式伽藍配置。現状はグランドである。今回は素通りした。

■四王寺（しおうじ）址・四王寺山

倉吉博物館は周辺整備中で休館だったが、偶々出てこられた職員の方に四王寺址への詳しい地図を頂けた。



途中、不入岡（ふにおか）遺跡（国史跡）が道の傍らに更地で残る。説明板あり。伯耆国府関連の施設・倉庫群。四王寺山登り口手前の丘陵も発掘中だった。

四王寺山（171.6m）は、伯耆国府や国分寺の北に位置する。山頂の四王寺址へは中型車なら通行できる林道があるが、登り口が少し分かりにくい。

四王寺（上図）・四天王信仰

奈良時代後半、新羅との外交関係が悪化する中、新羅と向かい合う太宰府、山陰・北陸諸国で四天王に対する新たな祭祀が執り行われるようになる。

宝亀五年（774）、太宰府の裏山、大野城内に四王寺（院）が建立される。「近年新羅がしきりに呪詛を行うので、これに対抗するために四天王像を造り、高地でかつ淨地を選んで安置せよ」というもの〔類聚三代格（るいじゅうさんだいきゃく）〕。

平安時代になると、貞觀九年（867）には、伯耆・出雲・石見・隱岐・長門の五国に「八幅四天王像」を送り、「四天王に帰依し、災変を消却すべきこと」を命じている。これらの国々は「西極」にあり、境界は新羅に近いので、「賊境」を望む「高地」に道場を設置せよとの下命である〔日本三代実録〕。「延喜式」には修法料・供養料の規定があり、実際に機能していたようである。

トレンチによる発掘調査が行われ、堂周辺から平安時代～鎌倉時代の陶磁器が出土した。

「現在のお堂が建っている基壇は、四王寺建立当初のものである可能性が高い。……お堂周辺の平坦地一帯に四王寺跡に伴う幾つかの施設などが存在すると考えられる」と推測されている。



お堂の裏手には展望台があり、新羅は見えなかったが、眼下に広大な景観が広がる（上図は西方を見たもの）。

□岩井廃寺（国史跡） 福井県岩美郡岩美町

国道9号線（想定山陰道）を東へ。途中、青谷上寺地（あおやかみじち）遺跡（鳥取市）では古代山陰道址が発掘調査で検出されているが、今回は先を急いだ。

伯耆の東端、蒲生峠（335m）を越えると但馬になる位置に岩井廃寺が立地する。岩井温泉を過ぎたあたり、式内御湯神社の社叢が見える場所。遠望のみ。

南へ山を越え因幡国府へ向かえば、双塔伽藍をもつ
柘本廃寺（国史跡 鳥取市国府町）が位置する。

峠を越え、湯村温泉の北側、岸田川左岸に**井土廃寺**（美含（みくみ）郡 現・美方郡新温泉町）が立地し、塔心礎が残る。山陰道・面治（めじ）駅家想定地。

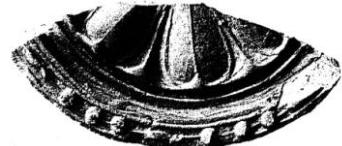
■村岡民俗資料館

兵庫県香美町村岡。

明治27年（1894）

に建築された旧美方郡

役所を解体復元した資料館の展示品は出色である。



金銅装頭椎（かぶつち）大刀・金銅装双龍環頭大刀・金銅装馬具（文堂古墳）、石材に描かれた蓮華文（長者ヶ平2号墳）、耳杯型高杯（八幡山6号墳）、そして、**殿岡廃寺**の軒瓦など。古瓦散布地は寺河内集落の善性寺裏山の由。遺構は確認されてない。

軒丸瓦は、外縁に三重の圏線を作り、その上に3個一対の珠文をハ組配置する（上図）。完形品も展示される。但馬で出土する「山田寺亞式」軒丸瓦のうち、最も北白川廃寺（山背）例に近いとも指摘される。軒平瓦の凸面には施文が見られる〔参考文献を参照〕。

村岡地域には**七美（しちみ）郡家**と**射添（いそう）駅家**が想定され、矢田川沿いを日本海に出れば**長見寺廃寺**（美含郡 香美町香住）が立地する。

□法興寺廃寺 朝来市和田山町

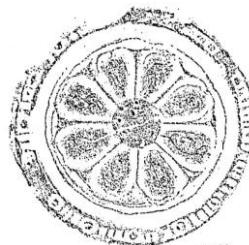
住宅建設などに伴う発掘調査により、古新羅系の特徴をもつ軒丸瓦が出土している〔右図〕。



菱田氏〔2013〕は、「有稜八弁のもので、一見すると古新羅的な様相を示す。日本列島内での伝播関係を示す資料もなく、直接的な伝播によるものと考えられる。時期的にも7世紀第3四半期としてよく、三輪君根麻呂〔注〕の帰国にともない、僧侶や技術者が渡来した可能性」を指摘されている。

■和久寺（わくでら）廃寺 福知山市

国道9号線を東へ。薄暮の頃、目的地の鹿島神社に到着。丹波国天田郡和久郷。境内には塔心礎が残る。寺域は境内周辺のほぼ一丁四方と推定される。3次の調査により、塔、金堂、僧坊、回廊、築地、工房址などの一部が確認された。和久寺址からは「山田寺亞式」軒丸瓦と顎部施文軒平瓦が出土した。



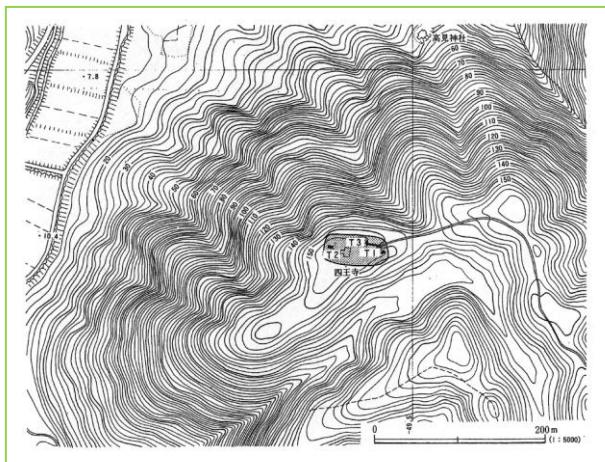
軒丸瓦の周縁には珠点と珠点との間に四本の縦棒からなる輻線文（ふくせんもん）がみられる〔上図↑〕。

和久寺廃寺で予定終了。あわただしい一日で、走行距離、およそ500km、13時間だった。

*引用・参考文献はむくげの会HPを参照下さい。

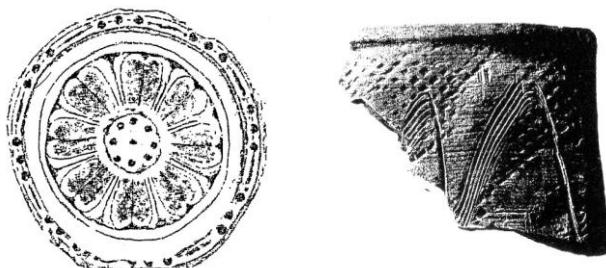
■引用・参考文献

史跡整備ネットワーク会議 山陰遺跡ガイドブック 4
 『山陰の古代遺跡～律令国家と風土記の時代～』
 倉吉市教育委員会 1999 『大原廃寺発掘調査報告書』
 倉吉市教育委員会 1995 「四王寺跡」
 『倉吉市内遺跡分布調査報告書 VIII』



上記「報告書」より

中林隆之 2005 「護国經典の読経」
 『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館
 近藤 謙 2008 「古代の四天王信仰と境界認識」
 『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』 5
 兩丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001
 「殿岡廃寺」『北近畿の考古学』



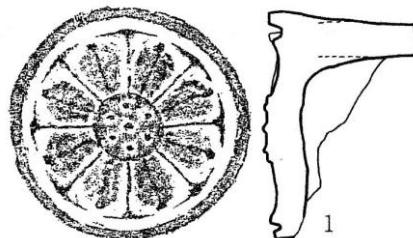
单弁八弁蓮華文軒丸瓦 頸部施文軒平瓦
 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 2014
 図録『文堂古墳』



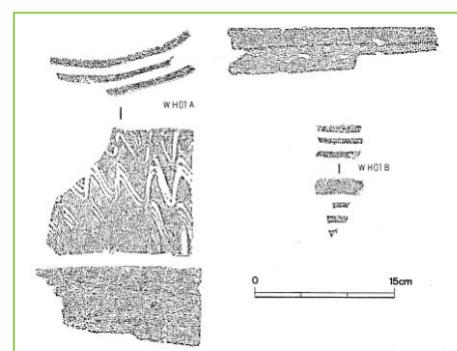
蓮が描かれた石材 長者ヶ平2号墳 壁画か？

縦9cm・横18cm 周濠付近から出土
 中央に壺、周囲に六弁の花弁か
 “但馬最古の瓦”法興寺跡出土
 「但馬国府・国分寺館ニュース」10号 2007年

『法興寺跡』和田山町教育委員会 1998年



素弁八弁蓮華文軒丸瓦
 大槻真純 1983 「和久寺跡 第1次発掘調査」
 『京都府埋蔵文化財情報』第7号
 京都府埋蔵文化財調査研究センター
 大槻真純 1987 「和久寺の瓦」『京都府埋蔵文化財論集』
 第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター



菱田哲郎 2002 「秦氏の寺とそのネットワーク」
 『京都と京街道』吉川弘文館
 菱田哲郎 2005 「山背の山田寺式軒瓦」
 『古代瓦研究 II』奈文研・古代瓦研究会
 菱田哲郎 2013 「白村江戦闘以後、日本の渡来系寺院に
 みられる百濟佛教の影響—瓦當を中心にして—」
 韓国国立扶餘文化財研究所主催学術セミナー
 前岡孝彰 2007 「但馬の古代寺院とその軒瓦」
 『考古学論究一小笠原好彦先生退任記念論集一』
 寺岡 洋 2012 「伯耆・因幡の古代寺院を訪ねて」
 『むくげ通信』253 むくげの会
 寺岡 洋 2013 「加古川流域と山背・但馬—「山田寺亞式」
 軒丸瓦は語る—」『むくげ通信』258 むくげの会
 寺岡 洋 2013 「加古川流域の「山田寺亞式」軒丸瓦と
 頸部施文軒平瓦」『むくげ通信』259 むくげの会
 [注]

三輪君（みわのきみ）根麻呂 百濟戦役に参加した将軍
 ・『日本書紀』天智二年（663）三月条
 「中将軍（そひのいくさのきみ）三輪君根麻呂」
 *救援軍27,000人を指揮した3人の将軍の一人
 ・「粟鹿（あわか）大明神元記」
 神部直（みわべのあたい）根マロ（門十牛）は、齊明天皇
 の時代に但馬国の民を率いて新羅との戦いに参加し、
 帰国して朝来郡大領（だいりょう 郡司）になった。
 『兵庫県史 史料編 古代1』兵庫県 1984 p591
 *式内・粟鹿神社も朝来郡に位置する